－所蔵作品紹介－

難波田　龍起　NAMBATA Tatsuoki

生の交響詩

せいのこうきょうし

作品データはこちら

４月８日から５月14日まで、当館では難波田龍起（1905-1997、旭川市生まれ）の開館以来２度目の回顧展を開催する。92歳の長寿を全うしたこの画家の、没後最初の回顧展である。難波田のすぐれた作品を多数含む寺田コレクションと全国各地の美術館の第一級のコレクションなどで構成されたこの回顧展は、新宿の東京オペラシティアートギャラリーで昨年11月から今年の２月にかけて企画開催され、旭川に巡回されるのである。展覧会のキャッチフレーズ「生の交響詩」は、この作品名と同じである。

「生の交響詩」は、旭川美術館の開館10周年を記念して、旭川美術館の婦人ボランティア団体「常磐会」（ときわかい）が作者に制作を依頼し、当館に寄贈してくれた作品であった。旭川美術館の収蔵作品には青っぽい作品が多いから、今度は赤っぽい作品を描きましょう、と作者自身が筆者に話していたことを覚えている。影のようなイメージの重なり合いと上部のハイライトにより、人を静かで奥深い思索へと誘うような画面である。

彼は、自己の生きざまを、制作に反映させ、そしてそれを個人的な表現にとどめることなく、抽象表現や生命の宇宙の探求という、広く大きなテーマに結びつけて極めて完成度の高い作品を制作した。彼の作品の表情は、驚くほど豊かなものであり、人生、人格、体験、表現、思想、詩的霊感などが複合交錯し画面に現れてくる点は、作曲で言うオーケストレーションの例えも可能であろう。

彼は、この作品を描いた翌年から、「生の記憶」という、４点の大作シリーズに取り組んだ。90歳に年令の届こうとする時期に、それまでの作家活動の集大成とも言うべき気力充実した恐るべき名作群を残したのである。このほか、今回の展覧会では、彼が最後の病床で制作した初公開の「病床日誌」31点を含む油彩、水彩、版画計約200点を、全館展示する。20世紀日本美術の一つの到達点である難波田龍起の芸術に触れることのできるまたとない機会となるだろう。

旭川美術館だより「氷華」No.41（2000.３発行）「収蔵作品から」より